

猫の似づら絵師

出久根 達郎 著

主人公は江戸・南八丁堀の通称「金時長屋」に住む銀太郎。彼はどんな絵を描いても、どうしても猫になってしまったため猫の似顔絵描きになりました。そんな銀太郎を中心に色々な事件が起こります。そこに「貧乏神売り」の丹三郎、毎日趣味でうどんばかりを打っている源蔵（とても博識）が加わり事件を解決してゆきます。

将軍家御用達の猫を商う店の御曹司と、同じく将軍家御用達の鼠を商う店の令嬢との江戸版ロミオとジュリエットの話や、地回りの親分に一泡吹かせる話など、日常で本当にありそうな事件ばかりなので、緊張したりすることなくのんびりと読むことができました。

今まで読んでいた歴史小説と違うところ、登場人物達が使う言葉です。たとえば、源蔵にうどんの味見を頼まれた銀太郎達の会話では「よござんす。おあつらえに、腹が喜多八弥次郎ですよ」「そいつは強敵好都合・・・」と、こんな具合です。読んでいて「どういうこと？」と一瞬止まってしまいました。なんとこのんびりした会話だろう！でもややこしいし、まだるっこしい会話やなあ。と思いました。

この著者は悩み相談の回答者をしていて、そのキツパリサツパリとした回答が面白かった。どのような物語を書くのか興味がありこの本を借りました。本文もさることながら後書きの方が面白く感じました。

野原



文藝春秋

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞